

# 基本の運動(水遊び)における学習環境の現状と課題<sup>†</sup>

— M市小学校の調査結果をもとに —

神保 昌子\*・平野 智之\*\*・加藤 謙一\*\*

真岡市立東沼小学校\*

宇都宮大学教育学部\*\*

本研究は、低学年の水泳指導における児童のつまずきと、それに関する要因や学習環境の現状を調査し、基本の運動(水遊び)の学習指導の問題点を明らかにしようとした。その結果から、次のことが明らかになった。すなわち、児童のつまずきでは、①水に対する恐怖心、②水深に対する不安感、学習環境の問題点では、①基礎的な水泳技能の指導不足、②時間割の配慮の問題、③施設・設備面の問題、などであった。

キーワード：つまずき、水深、恐怖心、個人差、指導者不足、学習内容

## 1 はじめに

小学校体育は、「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」ことを目標としている。これは生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践するための資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力及びたくましい心身を育てることによって、現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎づくりを目指しているものである<sup>4)</sup>。「体力・スポーツに関する世論調査」<sup>8)</sup>では、国民の実施スポーツ種目第5位に「軽い水泳」があげられていることや今後行ってみたいスポーツでは「軽い水泳」が2位にあげられている。これらのことから、水泳に対する国民の関心の高さがうかがえる。また、屋内プールの充実<sup>5)</sup>や水(浮力、水圧、粘性等)の特性という観点からも水泳はもちろんアクアティック

スポーツ全般は生涯スポーツに適していると言える。故に、学校で体育の指導にあたる教員は、生涯スポーツの導入時期である小学校低学年の基本の運動(以下「水遊び」)を丁寧に指導することが求められる。

近年、社会環境や生活様式の変化が、運動に積極的に取り組む者とそうでない者の二極化に拍車をかけている<sup>1)</sup>。学校水泳においても例外なく、経験率が最も高い習い事はスイミングクラブである<sup>2)</sup>ことからわかるように、高い技能が習得がされている児童がいることも否定できない。それに対し、原因はそれぞれであるが、最初から水に対して拒絶反応を示す児童もいることは否めない。また、基本の運動での導入時でのつまずきのために、水嫌いになってしまう場合もある。学校水泳は、とくに水が苦手な児童に対しては、水慣れを経験させることができる貴重な場である。したがって、前述のような水泳が苦手な児童の問題点を究明することは、体育を担う教員には有意義であろう。

<sup>†</sup> Masako JINBO\*, Tomoyuki HIRANO\*\*, Kenichi KATO\*\* : Present condition and problem of the learning environment in the fundamental motion(introductory water activities)-in the base the survey results of the elementary school in M City-

\* Higashinuma Elementary School, Moka

\*\* Faculty of Education, Utsunomiya University

つまずきのある児童は、何らかの理由で未習得の課題があるということが考えられる。例えば、「水が嫌い」や「水は苦手」など、要するに「水に対する恐怖心」がある。水の何が恐いのかを具体的に調査し原因を究明することは、水泳を指導する上で重要な手がかりになると考えられる。また、指導による原因であるのか、施設設備面に原因があるのか、指導体制面に原因があるのかなど学習環境を明らかにすることも、学校水泳として指導を進めていく上で意味あることであろう。すなわち、児童のつまずきの実態や指導状況、教員が抱える問題点から、基本に立ち返り、改善を要する事項の検討をすることも必要であろう。

本研究の目的は、小学校教員を対象に初歩的な水泳指導における児童のつまずきの実態と水泳指導時に感じる問題点を調査し、学習環境の指導体制面と施設環境面の現状にもとづいて、その改善の可能性を探ることである。

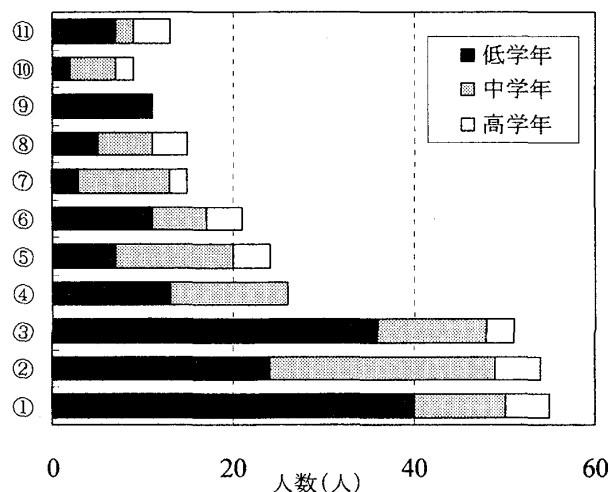
## 2 調査方法

調査内容は 11 項目あり、以下の 3 つに大別できる。①初歩的な水泳指導における児童の実態について、②指導上の問題点について、③学習環境についてであった。調査用紙は、M 市立小学校全 15 校に配布した。①と②については、実際に授業を行った各学年 1 名の教員を対象に③については、各校の体育主任担当者 1 名または内容的に回答可能な教職員 1 名を対象に、無記名で調査を行った。上記①と②の対象者である教員が指導した児童数は総計 2085 名（低学年 668 名、中学年 690 名、高学年 727 名）であった。調査期間は、平成 18 年 11 月 21 日 - 12 月 7 日であった。調査用紙の回収率は、①②については、98.9% (89 名：男性 40 名、女性 49 名)、③については、100%であった。調査内容は末尾に示した。

## 3 結果

### (1) 初歩的な水泳指導における児童の実態

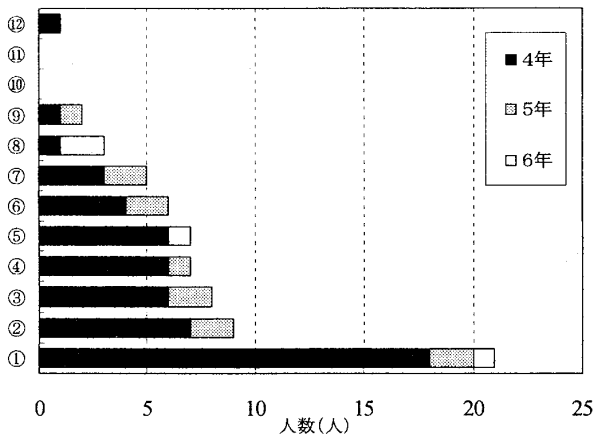
図 1 に、水泳指導における児童が感じる恐怖心を示した。理由の上位 3 つは、水しぶきや泡への嫌悪感 (55 人)、支持点のない不安感 (54 人)、水深への不安感 (51 人) であった。他の理由として、呼吸できない不安感、耳、鼻、目の不快感などがあげられた。また、上位 3 つの理由のうち、水しぶきや泡への嫌悪感や水深への不安感は、低学年児童が半数以上を占めた。



- ①水しぶきや泡への嫌悪感
- ②固定した支持点のない不安感
- ③水深への不安感
- ④呼吸できない不安感
- ⑤耳への不快感
- ⑥鼻への不快感
- ⑦幼児体験の影響
- ⑧目の不快感
- ⑨水温の不快感 (冷たさ)
- ⑩不明
- ⑪その他

図 1 児童が感じる恐怖心

図 2 に、4 年生以上の児童が水に浮けない理由を示した。最も多いものは、支持点のない不安感 (21 人) であり、そのうち 18 名が 4 年生であった。他の理由として、水しぶきや泡への嫌悪感、呼吸できない不安感、耳、鼻、目の不快感などがあげられた。また、水に潜れない児童数は、低・中・高学年の順に 52 人 (8%)、33 人 (5%)、7 人 (1%) へと学年が上がるにつれ、減少した。



- ①固定した支持点のない不安感  
 ②水しぶきや泡への嫌悪感 ③鼻の不快感  
 ④呼吸できない不安感 ⑤幼児体験の影響  
 ⑥耳の不快感 ⑦目の不快感 ⑧不明  
 ⑨水深 ⑩水温 ⑪体質 ⑫その他

図2 4年生以上の児童が水に浮けない理由

(2) 指導上の問題

図3に、息こらえ・バブリングを指導した教員の割合を示した。息こらえを指導した教員は、低・中・高学年の順に 50%、47%、37%へとやや減少傾向を示した。バブリングを指導した教員は、低・中・高学年の順に 47%、67%、67%であった。

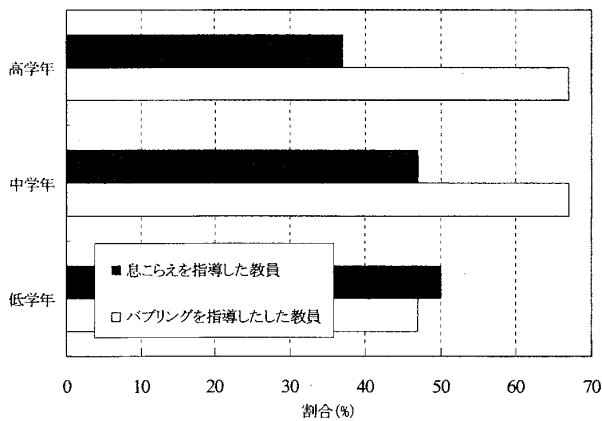


図3 各学年における息こらえ・バブリングの指導状況

図4に、指導者不足を感じている教員の割合を示した。指導者不足を感じている教員の割合は、低・中・高学年の順に 10%、37%、33%であった。また、指導者不足を感じている教員が指導している児童数の平均値は、25.3人(標準

偏差 9.3) であり、その中で最大数は 40人、反対に最小数は 5人であった。

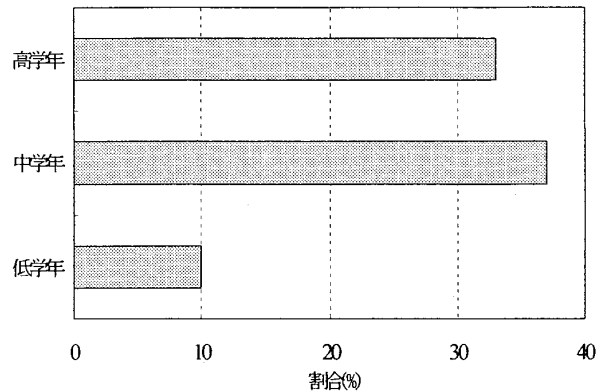


図4 指導者不足を感じる教員の割合

表1に、低学年を担当している教員が感じている問題点を示した。その中で主なものは、個人差が大きいためきめ細かい指導ができないことであった。

表2に、低学年を担当している教員があげる授業の工夫点を示した。その中で主なものは、泳力を考慮したグループでの学習指導やグループ内での子ども同士の教え合いなどであった。

(3) 学習環境

図5に、水泳指導時の学習環境を示した。①は同学年等の同時限の指導を実施している学校の割合、②は複数学級の同時限の指導を実施している学校の割合、③は低学年の授業時間を業間前後に設定している学校の割合、をそれぞれ示した。それらの割合は、①が 47%、②が 67%、③が 40%、であった。

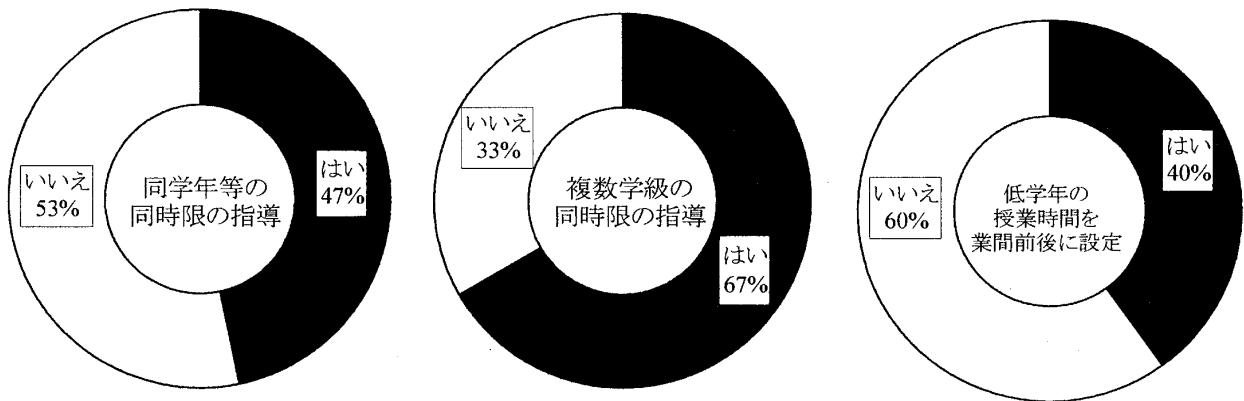
各学校におけるプール環境は、全学校にメインプールが設置されており、その中で 13% (2校) が低学年用のサブプールを保有していた。メインプールの最大水深と最小水深は、それぞれ 1.15 ± 0.07 m、0.87 ± 0.07 m であった。サブプールの最大水深と最小水深は、それぞれ 0.83 ± 0.11 m、0.60 ± 0.14 m であった。また、各学校におけるビート板の保有数は、平均で 54 枚、最も多い学校が 120 枚、反対に最も少ない学校が 30 枚であった。

表1 低学年指導者が感じる問題点

性別	年代	学年児童数	問題点
女性	30代後半	1年38名	・個人差が大きく、一人一人に時間をかけたいが、学級の数が多くて指導が行き届かない。
女性	30代前半	1年12名	・一斉指導している中で、潜れない子、水への恐怖心がある子への指導ができてにくい。
不明	40代後半	1年30名	・どうしても担任一人では補助が難しいので、入門期は、プールの浅い所で友達と一緒に手をつながせたりして(上手な子が手を引くなど)なれさせた。(小さな先生)
女性	50代前半	2年38名	・低学年は水遊びなので楽しく取り組む中でいろんなことができるようになっていけばいいと思うが、泳力差というより、体調を理由に水に入れない児童がいる。(カード忘れとかもいる。)
女性	30代後半	2年17名	・泳ぐということへの取り組みの点でも、自ら泳ごうとする積極性が見られないので、指導しようとしても児童自身がやろうとしない。
男性	30代後半	2年14名	・水泳は6月から7月が指導の時期にあたり、学期末(3学期制)のまとめの時期とも重なる。よって2時間続けて時数を取り、余裕を持って指導に当たりたいが、他教科の時数や使用学年との調整が難しい。

表2 低学年指導者があげる工夫点

性別	年代	学年児童数	工夫点
女性	40代後半	1年31名	・泳力に合わせて、グループ分けをして、2人で指導した。
女性	40代前半	1年7名	・低学年の場合に限らず泳力差があっても当然だと思っている。指示したことができなくてもコンプレックスにならないように言葉かけに注意している。流れるプールと称して一定方向に流れを作ると泳げない子も歩いたり走ったりする中で、自然に顔に水がかかったり潜ってしまったりする場が作れてよい。楽しいのでやってみようという気になるようだ。あせらず待つ姿勢が大切だと思う。子どもは慣れてとどんどん進歩する。
女性	40代後半	2年17名	・スイミングなどで泳力が優れている子に模範を見せてもらい指導に生かしている。
女性	30代後半	2年9名	・できる子ができない子に教える場を設けた。(グループでの学習)
女性	40代後半	2年25名	・コースを変え、グループ分けしたりしている。
女性	30代後半	2年27名	・泳力別に課題をかえる。



①TT形式・習熟度別指導を目的とする同学年又は低・中・高学年の複数学級で同時限の指導体制をとった小学校の割合

②事故時に備えて、意図的に複数の指導者をプールに配置することを目的として、異学年・同学年を問わず複数学級を同時限の指導体制をとった小学校の割合

③着替え時間等を考慮し、実質面での授業時間確保を目的として、低学年の体育授業を業間前後に設定する指導体制をとった小学校の割合

図5 水泳指導時の学習環境

表3に、水泳の授業を実施するための気温及び水温を示した。半数以上の学校は、水泳の授業を実施するための気温と水温をそれぞれ24℃以上かつ22℃以上としていた。また、プールフロアを所有している小学校は15校中5校であり、その保有数の平均値は4台（標準偏差3.2）であった。その中で、最も多い学校で10台、最も少ない小学校で1台であった。

表3 水泳の授業を実施するための水温と気温

	水温 (°C)				無記入
	22	23	24	25	
気温 (°C)	22				
	23				
	24	53%	13%		
	25	13%	7%		
	無記入			7%	7%

#### 4 考察

ここでは、M市内小学校教員を対象とした水泳指導に関する調査に基づいて水遊びにおける問題点を探ることとする。水泳指導における児童が感じる恐怖心は、①水しぶきや泡への嫌悪感、②固定した支持点のない不安感、③水深への不安感が主なものとしてあげられた。このうち①、③は低学年児童の割合が半数以上を占めているのが特徴的である。

また、②の固定した支持点のない不安感では中学年の割合が最も多かった。この恐怖心は、水に浮いたり、潜る学習に生じるものである。本来①-③の理由は、水泳を学習する以前の水に親しむための水遊びで解決するものである。すなわち、これらの障害をクリアしない限り、泳法を学習する段階に進むことはできない。したがって、まずは低・中学年児童にみられる水遊びでのつまずきの問題点を教員は十分理解しておく必要がある。

低学年のつまずきの大半は、水そのものへの恐怖心であった。したがって、日常生活の洗顔やシャワーを浴びる機会でも、水に対する恐怖心

を取り除く、工夫することが重要である。また、水泳の授業を行うための気温・水温は、それぞれ24℃、22℃以上であった。しかし、日本水泳連盟<sup>2)</sup>が奨励している水温は28℃以上であることを考えると、一般的に行われている水温は児童、とりわけ低学年には低いものであり、このことも恐怖心を助長する要因になっていると考えられる。

中学年の運動領域は、3年生では、「基本運動（浮く・泳ぐ運動）」に、4年生では「水泳」になる。これらの学習過程においては、水に潜る頻度も増えることになる。潜れば浮力を受けて支持点を失い、水中では不安定な状態となる。泳ぐ動作は、浮くことが前提であるから、アルキメデスの原理により、潜らなければ浮くことはできない。したがって、上手に浮くためには怖がらずに潜ることが必要となる。しかし、水に対する恐怖心をもった子どもは、潜ることができないので、上手に浮くこともできない。つまずきを持つ子どもにはまず、怖がらずに顔を水につけたり、その場で潜ることをできるようにすることが重要であろう。これに関連して、来栖<sup>3)</sup>は水に浮くために必要な息こらえの時間は3秒間であることを指摘している。それを実際の指導に生かすにはだるま浮きのような教材を用いて教員がそばで見守りながら補助して行うことが一方法として考えられる。

中・高学年において、息こらえの指導は37 - 50%、バブリングの指導は、47 - 67%みられた。このことは、すでに水遊びで学習されているはずの内容が、中高学年になっても定着していないことを示唆している。これらの教材は、中・高学年では水泳の呼吸（息つき）につながる指導という点でも重要なものである。また一方では、中高学年を担当している教員の33 - 37%は指導者不足も指摘している。このことは、安全面を十分確保するという理由も考えられる

が、中・高学年においても依然息こらえの指導も必要であり、個人差が拡大したことによって、個に応じた指導が十分行き届かなくなったことを示唆していると考えられる。

さらに、指導する際の問題点を自由記述式で回答を得たところ、教員があげる問題点の多くは指導者不足であった。問題を感じている教員27人中24人(89%)が何らかの指導場面で指導者不足を感じていた。低学年を担当する教員にも少数であったが、個人差の問題や一斉指導の難しさについての記述はあった。低学年を担当する教員と比べ、中・高学年を担当する教員が問題点を感じている割合が高いこともわかった。低学年では県や市の施策により、アシスタントティーチャーが保障されているが、中・高学年においても低学年の学習内容を指導しなければならない実態を考えると、アシスタントティーチャーが効果的に機能しているかどうか懸念される。一方、中高学年の教員は、息こらえやバブリングの指導状況から推察すると、つまずきのある児童に合わせた授業を展開し、全体を見とれないことや泳力の高い児童に十分な指導ができないことを問題視し、指導者不足を指摘していることが考えられる。これは、水遊びにおける息こらえやバブリングの習得が不十分な状態であるために、中高学年で拡大した個人差に対応できないことが考えられる。これらの対策として、同学年や低中高学年ごとに同時限の指導を取り入れる工夫をし、同時限の指導者を増員し泳力別指導を取り入れている小学校もある。グループ編成時の工夫で対応をしている学級もある。また、低学年において、指導者が児童とともに入水し補助したり、友だち同士の支持し合いを取り入れたたりした指導をした工夫が自由記述からわかった。

本調査より、さらに学習環境における改善策の可能性を探ると次のようなことが考えられ

る。まず何より低学年時における学習内容を充実させることが重要である。すなわち、低学年時に求められている学習内容は、水に親しむ能力を開発することである。そのためには、低学年を担当する教員の誰もが指導できる教材を実践することである。例えば、水に顔をつけられない段階であれば、「ワニ歩き」、プール形状からプール底部に着手できなければ、友だちの肩や腰に背後から両手でつかまり、「バスごっこ」で脚部をぶらぶらさせる遊びがあり、水に顔をつけられるのであれば、友だち同士両手をつなぎ「にらめっこ」「水中ジャンケン」「水中おしゃべり」など息を止めたり、はいたりする遊びがある。水に慣れてきたら、だるま浮き、クラゲ浮き、ラッコ浮きなどの遊びもある<sup>9)</sup>。小学校体育の目標に、仲間との競争、いろいろな課題への取組などを楽しく行うとともに、体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きができるようにするとある。水遊びの指導では、水中を歩く・走る、水に顔をつけたり、水中で目を開けたり、息をはいたり、浮いたりするような基礎となる動きを身につけることが重要である。これらを念頭に、教材を実践していくことが重要である。また、前述した基礎となる動きを指導するには、息こらえ・バブリングを指導することが必須となる。水中で身体を動かすには、息こらえとバブリングができなければ、その後の水泳指導において、大きなつまずきとなる。したがって、息こらえ・バブリングは、息継ぎの習得前には不可欠な学習課題と言える。低学年の水遊びで、息こらえ・バブリングを取り入れ、水中での運動を楽しむことは、特別な教材開発などは必要とはせず、これまでの教材を丁寧に指導すればよいだけことである。したがって、低学年体育を担当する誰もが指導できる内容であると考えられる。ただし、水遊びは、その後の水泳指導の基礎となるので指導

した内容が中高学年の水泳学習とどのように関連するのかを理解しておかなければならない。

また、水泳指導は、教員の努力だけでは効果が期待できないことがある。例えば、着替えや移動などへの対応である。こうしたことを配慮しながら、実指導時間を確保することである。業間前後に低学年の体育を設定することで工夫をしている小学校が40%である。こうした取り組みは、学校全体で検討しなければならない問題である。もう一つは、水深の問題である。小学1年生の身長全国平均値は、男子が $116.6\pm 4.8\text{cm}$ 、女子が $115.9\pm 4.4\text{cm}$ である。これに対して、プールの最大、最低の水深の平均値は、それぞれ $1.15\pm 0.07\text{m}$ 、 $0.87\pm 0.07\text{m}$ であった。このことから推察すると、多くの低学年児童は、身長に対して水深が深く、顔面が水面近くもしくは水没していることと考えられる。また、最低水深の90cmでも低学年児童では胸部や肩部が水中の可能性もある。このことは、低学年児童では水の抵抗や水圧などで思うように身体が動かない状態で、不用意に顔面に水しぶきがかかれば、呼吸しにくい状態であることが考えられる。このことから、水への恐怖心を持つ児童が低学年に多いことが推察される。

水深への対策としては、プールフローアを設置することである。現状では設置をしている小学校は5校のみ(33%)で、その台数も十分とは言えない。財源確保も問題になってくるが、ビート板では対応できない学習内容があることを認識することは必要である。水深を変えるには、水量を変える方法もあるが、オーバーフローができない状況は衛生的な問題も出てくる。また、スタート指導もある高学年との関わりで、水量を調節する頻度によっては、水道代や薬品代のランニングコスト問題もある。プールフローア設置と水量調節の損失と利得を考慮するべきであろう。

## 5 まとめ

本調査の結果から、M市小学校における低学年の水泳指導におけるつまずきとその問題点について、次のことが明らかとなった。低学年児童のつまずきは、水に対する恐怖心、すなわち①水しぶきや泡への嫌悪感、②水深への不安感であった。また、教員が感じている指導上の問題点は、③水泳技能の個人差が大きく、個々に対応することへの難しさを感じていることであった。以上のような問題を解決するための方策として、①及び②では、水遊びにおける学習内容の再確認と実践、③では指導時間確保の工夫や適切な水深確保が考えられた。

## 文献

- 1) 中央審議会：子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申），2002.
- 2) 樋田大二郎ほか：第2回子育て生活基本調査，ベネッセ教育研究所，4(1)pp.68-74，2002.
- 3) 来栖寛：初心者水泳指導の一研究—息こらえについて実験的研究—，体育学研究，15(5)，1971.
- 4) 文部省：小学校学習指導要領解説体育編，東山書房，pp.11-14，1999.
- 5) 文部科学省：我が国の体育・スポーツ施設現況調査，2002.
- 6) 文部科学省：学校水泳実技指導資料第4集 水泳指導の手引き，2004.
- 7) 文部科学省：体力・運動能力調査報告書，年齢別体格測定の結果，2005.
- 8) 総理府：体力・スポーツに関する世論調査，2(1)(2)，2000.
- 9) (財)日本水泳連盟：水泳指導教本，大修館書店，2002.

学校水泳に関する調査 (各学年1名の先生にお願いします。)

この調査は、小学校体育科基本の運動「水遊び」「浮く・泳ぐ運動」「水泳」に対する指導について調べようとするものです。それぞれについて記入上の注意を読んでお答えください。結果は統計的に処理するので、個人的にご迷惑をかけることはありませんので、ご協力いただければ幸いです。

\*下記の欄に、所定の事項をご記入ください。

1 該当する□にレ点をご記入ください。  
男性    女性  
21～25歳 26～30歳 31～35歳 36～40歳  
41～45歳 46～50歳 51～55歳 56～60歳  
1年担任   2年担任   3年担任   4年担任   5年担任   6年担任  
その他(出授業、体育専科、その他) \*該当するものに○をつけてください。

2 学級の児童数 (男子        人・女子        人)

3 現在、学級でスイミングクラブに通塾している児童数  
 (男子        人・女子        人)  
 過去に1年以上通塾経験のある児童数  
 (男子        人・女子        人)

このアンケートは、本年度の基本の運動「水遊び」「浮く泳ぐ運動」「水泳」の指導をもとにお答えください。該当する事項・最も近いと思われる事項にレ点をご記入ください。または、所定の事項をご記入ください。

Q1 あなたの学級には、入水することができない児童はいますか？いる ( ) 人   いない

\*入水できない理由として、具体的に考えられることは何ですか？

(一人の児童が複数の理由を持つ場合があります。全てお答えください。)

	水温への 不快感 (冷たさ)	水深への 不安 感	固定した支 持点のない 不安感	水しぶき や泡への 嫌悪感	呼吸で きかない 不安感	幼児体験 の影響	不明	その他
男(人)								
女(人)								

\*その他の理由 ( )

\*支援・指導として、効果があった方法や用具がありましたら、教えてください。( )

Q2 あなたの学級には、入水後、身体がこわばる児童はいますか？いる ( ) 人   いない

\*身体がこわばる理由として、具体的に考えられることは何ですか？

(一人の児童が複数の理由を持つ場合があります。全てお答えください。)

	水温	水深	支持点	水への 嫌悪感	無呼吸	幼児体験 の影響	不明	その他
男(人)								
女(人)								

\*その他の理由 ( )

\*支援・指導として、効果があった方法や用具がありましたら、教えてください。( )



Q3 あなたの学級には、ゴーグルを付けても、水に顔をつけられない児童はいますか？

いる ( )人 いない

\*できない理由として、具体的に考えられることは何ですか？

(一人の児童が複数の理由を持つ場合があります。全てお答えください。)

	水温	水深	支持点	水への嫌悪感	無呼吸	幼児体験	耳の不快感	鼻の不快感	目の不快感	不明	その他
男(人)											
女(人)											

\*その他の理由 ( )

\*支援・指導として、効果があった方法や用具がありましたら、教えてください。( )

Q4 あなたの学級には、水にもぐるができない児童はいますか？

いる ( )人 いない

\*できない理由として、具体的に考えられることは何ですか？

(一人の児童が複数の理由を持つ場合があります。全てお答えください。)

	水温	水深	支持点	水への嫌悪感	無呼吸	幼児体験	耳	鼻	目	不明	その他
男(人)											
女(人)											

\*その他の理由 ( )

\*支援・指導として、効果があった方法や用具がありましたら、教えてください。( )

Q5 「息こらえ」(水中で息を止めること)の指導について 指導した 指導していない

\*指導の方法を具体的に教えてください。(指導形態、指示、手順、用具等)( )

Q6 「バブリング」(水中で息をはくこと)の指導について 指導した 指導していない

\*指導の方法を具体的に教えてください。(指導形態、指示、手順、用具等)( )

\*1・2・3年生を指導された方はQ8に進んでください。

(4・5・6年生を指導された方にお聞きします。)

Q7 あなたの学級に、浮くことができない児童はいますか？

いる ( )人 いない

\*浮けない理由として、考えられることは何ですか？(複数回答可)

	水温	水深	支持点	水への嫌悪感	無呼吸	幼児体験	耳	鼻	目	体質	不明	その他
男(人)												
女(人)												

\*その他の理由 ( )

\*支援・指導として、効果があった方法や用具がありましたら、教えてください。

Q8 泳力差があることで、指導上問題点ありましたら、教えてください。

また、それらをどのように指導していますか。工夫していることがあれば、教えてください。

(指導上の問題点) ( )

(指導上の工夫点) ( )

\*お忙しいところ、ご協力ありがとうございました。心からお礼申し上げます。

## 学校水泳に関する調査

このアンケートは、学校水泳について調べようとするものです。結果は統計的に処理するので、個人的に迷惑をかけることはありません。ご協力をよろしくお願いします。

\*回答は、該当する□にレ点を記入してください。または、所定の事項をご記入ください。

### 1 施設・設備・用具等について

Q1 水泳場に貴校が有するもの全てにレ点をご記入ください。または、所定の事項をご記入ください。

- 一般遊泳用プール ( コース・縦横 m× m水深最大 m最小 m)
- 低学年用プール (サブプール) ( コース・縦横 m× m水深最大 m最小 m)
- シャワー ( 口) 洗眼用水道 ( 口) 洗体槽 足洗い場 コースロープ ( 本)
- ビート板 ( 枚) プールフロア ( 台) ヘルパー パドル フィン

### 2 教育課程について

Q1 時間割作成時に学校として考慮・実践した事項全てにレ点をご記入ください。

- プール使用規定の作成・プール開設の判断基準 (水温 °C・気温 °C) \*ご記入ください。  
その他の判断基準はありますか。( )
- プール使用規定の全職員の共通理解
- 同学年・ブロック間の同時間帯の指導  
(TT形式・習熟度別指導を目的とする)
- 複数クラス (異学年・同学年を問わず) の同時間帯の指導  
(事故時に備えて、意図的に複数の指導者をプールに配置することを目的とする)
- 低学年の授業を業間前後に設定  
(着替え時間等を考慮し、実質面での授業時間の確保を目的とする)
- シーズン中の特別時間割を作成 (上記の形態を実施するために)
- その他 ( ) \*ご記入ください。
- 特になし

Q2 体育的行事等、学校で参加・実施しているものに全てレ点をご記入ください。

・実施している学年にレ点をご記入ください。

- 家庭での健康観察カード利用 (検温有)  
全校一斉 1年 2年 3年 4年 5年 6年
- 家庭での健康観察カード利用 (検温無)  
全校一斉 1年 2年 3年 4年 5年 6年
- 校内水泳記録会 (それに準ずるもの)  
全校一斉 1年 2年 3年 4年 5年 6年
- 水泳検定  
全学年同一の検定表 1年 2年 3年 4年 5年 6年
- 着衣泳  
全学年 1年 2年 3年 4年 5年 6年  
実施している学級もある。
- 市水泳記録会 郡市水泳記録会 その他の水泳大会 各種大会に向けての練習会
- 夏季休業中のプール開放  
・本年度の開放日は何日間でしたか? ( 日間) \*ご記入ください。
- 夏季休業中のプール開放での監視役の協力依頼  
保護者 地域人材 地域人材 (有資格者) その他 ( )

\*ご協力ありがとうございました。